樫の木は、両手を広げ

樫の木は、両手を広げ　前編

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16937000

ダイの大冒険, マァム, ヒュンマ, レイラ, ヒュンケル, 勇者アバンと獄炎の魔王, ヒュンマフェス

ヒュンケルがネイル村でマァムと一緒に住むようになって、半年くらい経った後の物語。
「聖人は貧者にマントを与ふ」novel/16233299「夜半のぬくもり」novel/16344773の少し前から始まる話。

本作、人手不足（何？）につき、これまでご登場いただいたモブの皆さんをかき集めておりますので、ご注意ください。
さらには獄炎からも人員を引っ張っております。
設定盛りだくさんなので、ヒュンマなら何でも許せる人向け。
これを書くために、今まで書いた「村のくらし」シリーズの各話を並べ直し、時系列を作り、さらにはモブも整理し・・・とやたら手間のかかった作者泣かせの話（；；）。

2022.2.5開催ヒュンマフェス・ウインター合わせ。
2022.3.21表紙差し替え。表紙の写真は、photoＡＣhttps://www.photo-ac.com/様でお借りしました。umo（ゆも）様の「樫の木と新緑」という作品です。

樫の木は、両手を広げ　前編

　マァムは、いつもどおりの黄色のオーバーサイズシャツとパンツに身を包み、ロングブーツを履くと、ゴーグルを頭につけた。腰には、愛用の魔弾銃。呪文を詰めた弾丸の装備も忘れない。
　マァムは、最後に両手にグローブをはめると、玄関先で振り返り、母に声をかけた。
「じゃあ、母さん、行ってくるわね。」
　レイラは、マァムを見送り、玄関まで出てきた。そして、娘に忠告をした。
「気を付けてね。ここのところ、森の空気が変わってきているわ。モンスターも強くなっている。深追いは禁物よ。」
　すると、マァムは、明るい声で返事をした。
「大丈夫よ、母さん。私の腕、わかっているでしょう？」
「その自信が危ないのよ。あなたこそ、わかっているでしょう。」
　厳しくたしなめられ、マァムは表情を引き締めた。
　ここのところ、以前よりも、強力なモンスターが、ここネイル村の周囲に出没するようになっている。腕に覚えのある村の男たちも、追い払おうとしたモンスターからの手ひどい返り討ちに遭い、大けがをするということが増えていた。
　マァムは、さすがに勇者パーティの一員だった両親のもとに生まれただけあって、１６歳の女子ながら、村で最も腕の立つ戦士であった。
　この日も、マァムは、村の男たちに代わって、森へ警備に出ようとしていた。
　マァムは、レイラの言葉に頷いた。
「うん。大丈夫。危ないと思ったら撤退するわ。」
「・・・行ってらっしゃい。」
　レイラは複雑な表情でひとり娘を見送った。

　マァムが家を出たあと、レイラは、一人で、自宅の裏手の庭に回った。

庭の隅には、以前、レイラの亡き夫が稽古に使用していた立木がそのままに残されていた。
地面に深く突き刺された稽古用の立木は、太い丸太に縄を何重にも巻いたものであり、生前、ロカは、この立木に向かって何度も剣で斬りかかり、稽古をしていた。
レイラは、小さめのダガーナイフを取り出すと、右手に持って構えた。そして、足を踏み、立木の一点めがけて、ダガーを放った。
その瞬間、レイラが体重をかけた右足首に、鋭い痛みが走った。レイラは顔をしかめた。
レイラの視界に、彼女が放ったダガーが、立木の縄をかすめ、そのままあらぬ方向に飛んでいくさまが映った。
レイラは、しゃがみこみ、右足首を手でさすった。
そして、少しして、痛みが去ると、今度は、ダガーを投げた右手を見つめた。その手は、しびれで震えていた。
そこには、かつて、勇者アバンとともに世界を救った僧侶戦士の姿はなかった。
地底魔城での魔王ハドラーとの戦いは苛烈だった。
あの戦いで、レイラは、アバンを魔王の元に進めるために、ロカとともに体を張って戦った。その結果、いまでも、彼女の身体には、癒えない傷が残されていた。
日常生活に支障はない。
だが、もう、レイラには、往時のスピードも技の冴えもなく、キラーパンサーでさえ、容易く仕留めることはできなくなっていた。
レイラの脳裏に愛娘の姿が浮かんだ。背は伸びて、母である自分を追い越すほどになった。腕も立つし、機転も効く。
―俺は、マァムにはかなわねえよ。てか、マァムより強ええ奴、この村にいるのかよ。
マァムの同級生が、そんなことを言っていたのを思い出した。
レイラは、唇を噛んだ。思うように動かない、この足が、この手が、恨めしかった。

レイラがリビングで夕食の支度をしていると、玄関ドアがノックされた。レイラは、マァムが帰ってきたのかと思い、急いでドアを

開けた。
「すまないな、レイラ。忙しいところだったようだな。」
　玄関前に立っていたのは、愛娘ではなく、レイラの父だった。
　かつてはこの村の神父をしていたが、その職を、自身の甥に譲り、いまは隠居の身となっていた。
「お父様。どうぞ、入ってください。」
　レイラは、父を家の中に招き入れた。
　レイラの父アリアムは、リビングの椅子に腰かけると、あたりを見回した。
「マァムはいないのか。」
「警備に出ています。近頃、森のモンスターも強いものが出るようになってしまっていて、危険ですから。」
「あの子もしっかりしてきたな。かつてのお前を見ているようだ。」
「ええ・・・でも、心配です。」
「マァムは優しい子だ。お前を悲しませるような真似はするまいよ。」
　アリアムは、柔和そうな笑みを浮かべて、レイラを慰めた。
　彼は、持参してきた藤籠をテーブルの上に置き、レイラに示した。
「教会にイチジクをたくさんいただいたんだ。私にもおすそ分けがきたが、マァムが好きだと思ってな。」
　レイラは、籠の中を覗き込み、声をあげた。そこには、丸々としたイチジクがひしめきあうように並んでいた。これなら、ジャムにするにも十分だ。
「まぁ、こんなにたくさん。ありがとうございます。」
　アリアムは、その様子に、満足そうに微笑んだ。
「マァムは、昨日、私のところに寄ってくれた。そのときに、私の肩をもんでいってくれたよ。優しい子だな。」
　アリアムは、そう言って、孫娘を思い、目を細めた。

　マァムは、レイラの用意した夕食を平らげると、満足そうに笑みを浮かべた。

「美味しかった！母さんの作る料理は最高ね！」
「今日はマァムの好きなシチューだったからね。」
　今日の夕食は、レイラの得意なロモス風ビーフシチューだった。柔らかく煮込んだ牛肉が、パプリカや玉ねぎの甘みとよく合い食欲を誘うメニューだ。子ども向けにもよく作られる。
　レイラは、後片付けをしながらマァムに話しかけた。
「マァムは、子どものころからこれが好きだものね。」
「そうやって、子ども扱いする—。」
　レイラの言葉にマァムは口を尖らせた。
　すると、レイラが苦笑して、マァムに応えた。
「１６歳、もう立派な大人でしょう。」
　レイラの言葉どおり、マァムは、すでに、ロモスでは、成人扱いされる年齢になっていた。
　マァムは、レイラとともに食器を洗い、片付け終わると、リビングの長椅子に腰かけて足を伸ばした。今日は森を見回って、よく歩いたから、少し足が疲れている。
　マァムは、膝を曲げて足を抱え、自分のふくらはぎをもみ始めた。
「疲れた？」
　レイラの声にマァムは明るく答えた。
「ちょっとね。今日は結構歩いたから。でも、手近なところのモンスターはみんな追っ払ってきたわよ！」
　そう言って、マァムは力強く右腕を曲げてレイラに示した。その様子は、レイラには微笑ましくも、痛ましく感じられた。
　レイラは、努めて明るく娘に答えた。
「そう。それはよかった。さすがマァムね。頼もしいわ。」
　母の言葉に、マァムは満足そうな笑みを浮かべた。
「今日、おじいちゃんが来たわよ。マァムが肩揉んでくれたって、嬉しそうに言っていたわ。イチジクも籠いっぱい持ってきてくれたから、コンポートとジャムを作るわね。」
「本当！？やった！」
　言葉を交わしながら、レイラは、長椅子越しにマァムの後ろに立った。そして、娘の肩に手を添えた。そのまま、レイラは、両手

でマァムの両肩を揉み始めた。ちょうど、マァムがアリアムにそうしたように。
　マァムは不思議そうにレイラに問いかけた。
「母さん？」
　レイラは、呟くようにマァムに呼びかけた。
「・・・危ない真似はしないでね。」
　その声に真剣な色を感じ、マァムも素直に答えた。
「・・・うん、わかってる。」
　レイラとマァムは、母一人、子一人だ。アリアムはいるものの高齢であり、マァムに何かがあれば、レイラは一人になってしまう。マァムはそのことをよくわかっていた。大事な母を悲しませたくはなかった。
　レイラは、マァムに語り掛けた。
「マァム、もう少し村のみんなを頼ってもいいのよ。」
「・・・でも、危ないから。私は強いから大丈夫だけど。」
　客観的に見れば、マァムの言うとおりだ。マァムは、この時すでに、村で一番の戦士だった。
　しかし、今レイラの目の前にある彼女の双肩は、細く、小さかった。ここにこの村の安全のすべてが乗っているのかと思うと、レイラは苦しかった。
　レイラは、祈るような思いで、マァムに語った。
「マァム、肩の力を抜いて。楽にして。」
　その言葉を受け、マァムは力を抜き、レイラに身を任せた。レイラの両手が、マァムの両肩をもみほぐす。
　レイラはマァムの細い肩を見つめながら願った。この子の重荷が少しでも軽くなるように、と。

　マァムは、教会の前に立ち、空を見上げた。
　教会の前庭には、大きな樫の木が立っており、豊かな枝を広げていた。その太い幹は、何代も前の父祖の時代からこのネイル村を見守ってくれているのだろう。
　霊力が宿るという樫の木が、大きな手を広げてこの村を守っているように感じられた。

マァムが樫の木を見上げていると、教会から出てきた祖父が彼女に声をかけた。
「マァム。」
　マァムは振り返った。
「おじいちゃん。」
　アリアムは、孫娘を認めると、穏やかな笑みを浮かべた。
　マァムはアリアムに尋ねた。
「今日のお務めは終わったの？」
　マァムの問いに、アリアムはうなずいた。アリアムは、かつてはこの教会の神父をしていたが、今は、彼の甥、つまりレイラの従兄弟であるルカーシュにその職を譲り、引退していた。
　だが、引退した今も、アリアムは自身の祈りや瞑想のために、時折、教会を訪れていた。
　そのたびに、アリアムは、関係者しか立ち入りを許されない奥の間で、祈りを捧げていた。
「お前も教会に用があったのかい？」
「母さんから頼まれて、ハーブの種を持ってきたの。教会の薬草園で使ってほしいって。」
「もう用は済んだのかい？」
「うん。さっき、ルカーシュおじさんに渡したわ。そうしたら、おじいちゃんも来てるよって。奥にいるって聞いたから待ってたの。」
「そうか。ありがとう。」
「送ってくわ。」
　そうして、祖父と孫娘は連れ立って歩きだした。
　歩きながら、アリアムは独り言のように語り始めた。
「ルカーシュもよくやってくれているな。」
「そうなんだ。」
「うむ・・・。年若いから、後を任せたときは心配だったが、いまは、もうルカーシュが指導する立場だな。」
「うん。」
「ルカーシュは、若い頃は、姿が見えないと思ったら何日も帰ってこなくてなあ・・・ひょっこり帰ってきて、何をしていたんだと聞

いたら、旅をしていたというんだ。」
「なんだ、母さんと一緒じゃない。うちって、みんなそんな感じね。」
「ははは、違いないな。」
　アリアムはそう言って、快活に笑った。マァムもつられて笑みを漏らした。
「だが今は、ルカーシュも、レネーのこともよく見て、教えてくれている。」
「そうなんだ。」
「うむ。そうだな、そろそろレネーも一人で立たせて良い頃だ。もう少し勉強させるために王都に行かせるか、あるいは、神父の位をいただいて、ほかの村の教会を任せることになるかもしれんな。」
「え、そうなの？」
「ああ。
　そうか、お前の友達、レネーと親しいんだったな。」
「あ、うん。お付き合いしてるって。イレナが。」
「・・・そうか、それは早めに相談した方がよいかもしれないな。」
「うん。離れるかもって思ったら・・・二人で決断することがあるかもしれないものね。」
　祖父と孫娘は、ネイル村の教会で学んでいる若き神学者と孫娘の幼馴染のことを話しながら、次第に、話題を自分たちの方に引き寄せていった。
　アリアムは尋ねた。
「お前はいくつになったんだっけ。」
「もう２０歳よ、おじいちゃん。」
「そうか。もうそんなになるのか。
　お前の年のときには、レイラは、すでにお前を産んでいたな。
　あれから、もう、そんなに経ったのか・・・。」
「おじいちゃん、そんなに昔のことばかり言ってると、老け込んじゃうわよ。
　ちゃんと、ひ孫まで抱っこしなきゃ。」
「そうだな。ひ孫を抱くまでは死ねないな。」

そう言って、祖父と孫娘は互いに笑いあった。
孫娘は、祖父に尋ねた。
「おじいちゃん、今日は何をお祈りしていたの？」
すると、かつて神父であった祖父は、穏やかに微笑んだ。
「いつも同じだよ。」
「同じ？」
「そう。天に召されたこの村の同胞や我らの父祖に祈るのだよ。今を生きるお前たちを見守ってほしいと。そして、未来あるこの村の皆、幼い子どもたちに幸あれとな。」
祖父の言葉に、マァムは胸が温かくなった。
いまは亡い彼女の父も、祖父の祈る先にあるのだろうか。
マァムは尋ねた。
「そうなんだ・・・。
父さんにも・・・？」
アリアムはうなずいた。
「無論、ロカにも祈っておる。」
ふと、マァムは祖父に尋ねてみたくなった。今となっては、若くして亡くなった彼女の父を知る者は少ない。
「ねえ、おじいちゃん。・・・彼、父さんと似てる？」
「ヒュンケルか？」
「うん。」
すると、アリアムは、当たり前のことのように答えた。
「似ているところもあれば、まったく似ていないところもある。二人とも、それぞれ良いところがあるからな。」
「そっか・・・そうよね。」
祖父の言葉が腑に落ち、マァムもうなずいた。
アリアムは、過去を懐かしむような目をしながらつぶやいた。
「レイラがロカを追って旅立ち、村に戻ってお前を産んだ。
お前も、ダイくんたちを追いかけて村を出て、そうして、ヒュンケルとともにまたこの村に戻ってきた。
レイラを見送るときも、お前を送り出すときも、私は、本心では心配で仕方がなかった。
だが、お前たちはちゃんと帰ってきた。しっかりと、大きくなっ

て。
　きっと、レイラにも、お前にも、この村は小さすぎたのだろう。」
　そうしてアリアムは、穏やかな眼差しを孫娘に向けた。
「レイラはレイラ、お前はお前だ。
　ロカにもヒュンケルにも、それぞれ違う、良いところがある。
　お前はゆっくりと、ヒュンケルと幸せになればよい。
　レイラも私も、そう願っておる。」
「・・・ありがとう。」
　そのまま、二人はアリアムの自宅に向かって歩いて行った。
　ふと、マァムは背後から自分を呼ぶ声に気付いた。彼女は足を止めて振り返った。
「マァム―！」
　見ると、この村の若い青年が二人に向かって駆け寄ってきた。マァムは彼の名を呼んだ。
「シモン。」
　シモンは、マァムがアリアムと一緒にいるのに気付くと、アリアムに向かって頭を下げた。年長者を敬うのは、この村の掟の一つだ。
「マァム！あ、アリアム様。お務め、お疲れ様です。」
　彼はアリアムにあいさつをすると、慌ただしく、マァムに声をかけた。
「シカが獲れたんだよ、でかいやつ！それで、マァムのところにも分けようと思って持って行ったんだ。でも、誰もいなかったからさ。
　ヒュンケル、いないのか？」
　マァムは、シモンに答えた。
「ヒュンケルは、広場に出ていると思うわ。明日、子どもたちの武術大会でしょう？その準備をしているはずよ。」
　すると、シモンも思い出したかのような顔をした。
「あ、そっか。そういや、明日だったな。
　アリアム様のところにもお持ちしようと思ったんですけど。」
「おじいちゃんの分は、私が後で料理してから持っていくわ。

その方がいいでしょう？」
「そうだな。頼む。」
「じゃあ、アリアム様の分も、マァムんところに置いてくよ。あとで家に持っていくんでいいか？」
「ええ。ありがとう。」
マァムが礼を言うと、シモンは彼女に尋ねた。
「ヒュンケルのところには、このあと行くのか？」
「おじいちゃん送ったらね。」
「俺も、後で様子見に行くよ。」
すると、アリアムが口をはさんだ。
「マァム、行ってやるといい。私の方はいいから。」
「あら、大丈夫よ、おじいちゃん。おじいちゃんのこと送っていったら、すぐにヒュンケルのところに行くわ。すぐだもの、大丈夫よ。」
そう言って、マァムは、今度はシモンに向き直った。
「じゃあ、シモン、あとでね。私も後から広場に行くわ。」
「ああ、じゃあな。
アリアム様、失礼します。」
そうしてシモンは、マァムとアリアムに軽く頭を下げると、その場から立ち去った。
その後ろ姿を見送ると、祖父と孫娘は、家路へと急いだ。

マァムは、アリアムを自宅まで送ると、その足で、すぐに村の広場に向かった。
広場が目に入る前に、小気味よい、木の触れ合う軽快な音が耳に届いた。子ども用の軽い木刀の打ち合う音だろう。その合間に、聞き慣れた声が響いた。
「次っ！」
「はいっ！」
広場に着くと、その中心にヒュンケルがおり、順番に子どもたちの剣戟を受けていた。
ヒュンケルは、重厚な木刀を横一文字に持ち、子どもたちの剣を受け止めていた。

子どもたちが持つものは、ヒュンケルのものとは全く異なっていて、危険のない、軽い木刀で、枝を整えたと言ってもいいくらいのものだ。
　しかし、どの子も真剣に、その剣を構えており、渾身の力でヒュンケルに打ち込んでいた。
　マァムは、広場の隅に腰を下ろすと、その様子を眺めていた。子どもたちの一生懸命な様子がほほえましく、自然に頬がほころんだ。
　すると、そこに、彼女の友人が声をかけてきた。
「マァム。」
「ダナ。」
　マァムが見上げると、彼女の同級生がマァムの隣に立っていた。
　ダナは、彼女の夫のマクシムとともに、ネイル村で子どもたちを教育する機関である塾の運営を任されていた。今日広場に集まっている子どもたちは、普段から村の塾で学んでいる年代の子どもたちが多かった。
　ダナは、マァムに倣って、彼女の隣に腰を下ろすと、マァムに語り掛けた。
「一生懸命でしょう、みんな。」
　マァムもうなずいた。
「うん。それに楽しそう。」
「ヒュンケルが真剣に相手をしてくれているから、子どもたちも嬉しいのよ。
　真面目ね、彼は。」
「うん。」
「それに、教え方もうまいわ。その子がどこでつまずいているのかよくわかってくれる。
　マクシムも感心していたわ。」
　ダナは、ともに塾を運営している夫の名をあげた。
　マァムは、思いがけないヒュンケルの評価を聞き、幾分か驚いたように声をあげた。
「そうなんだ。」
「おかげで私たちも助かっているわ。」

そう言ってダナは、明るく笑った。
　マァムは嬉しくなった。
「あのね、ダナ。
　たぶん、そうやって、村のみんなの役に立ててるってことがわかると、ヒュンケルも嬉しいと思うの。彼は、こういう暮らしに縁遠かったから。」
　その言葉に、ダナはマァムに尋ね返した。
「戦士だったんだって？」
「・・・うん。」
「アバン様のお弟子だったんでしょう？
　子どものころ、アバン様とネイル村に来たことがあるって言ってたわね。」
「あ、うん。」
　マァムが頷くと、ダナはひときわ声をあげて語りだした。
「そう、そうしたらね。その話になったら、アレクが『俺は、ガキのコイツに、俺の方が４つも年上だったのに、勝てなかったんだ！』って怒ってて、『手合わせするぞ！』って言うもんだから、慌てて止めたのよ。本職だった人に敵うわけないじゃない。」
　そう言って、ダナはおかしそうに笑った。
　その話にはマァムにも心当たりがあった。
　かつて、アバンが少年ヒュンケルと世界を旅していたころ、ネイル村にしばらく滞在していたことがあったのだ。マァムは、レイラや村の人々から聞いた話を思い出した。
「そうね、ヒュンケルがネイル村に来た時にも、今回みたいな武術大会があったんだっけ。私、覚えてないけど。」
「私も覚えてないわよ。しょうがないわよね。私たち、３歳くらいだったんでしょう？」
「うん。」
　マァムはうなずき、言葉をつづけた。
「そのときの試合で、まだ子どもだったヒュンケルが勝ち残って、決勝戦でアレクに当たったたって話、私も聞いたわ。」
「そうそう！それで相打ちだったんでしょう？子どものころに４つも年上って、圧倒的な差なのに、それで負けなかったんだものね、

強いわけよ！だからアレクは今でも悔しいみたいなのよ。」
　そう言って、ダナは、いたずらっぽく笑った。
　マァムもつられて笑みをこぼした。
「でもね、ダナ。」
　マァムは言葉を続けた。
「私はアレクに感謝してるのよ。すごく昔のことだったのによく覚えてくれていて。
　ヒュンケルがこの村に越して来たばかりの頃、アレクが声をかけてくれたのよ。ヒュンケルが、あのときの試合で当たった子だってすぐに気づいてくれて。
　ヒュンケルも驚いていたわ。
　でも・・・嬉しそうだった。」
「ふーん。アレクの負けず嫌いも役に立つことがあったのね。」
「もう、ダナったら。」
　マァムとダナが笑いあっていると、二人と同じ年頃の娘が近づいてきた。
「マァム、ダナ。」
　マァムは声の主を見上げて声をかけた。
「イレナ。」
　イレナは、二人の隣に腰を下ろすと、二人と同じように、広場に視線を向けた。
　広場の真ん中で子どもたちを相手にしているヒュンケルを視界に映し、イレナは、意味ありげな笑みを浮かべた。
「・・・ふ〜ん、マァムの旦那さん、けっこう優しいじゃない。」
　途端に、マァムは頬を赤らめた。
「だ、旦那さんって・・・！」
「・・・なに動揺してるのよ。半年も一緒に住んでいて。」
「そ、そうだけど・・・。」
「違うの？」
「・・・違わない。」
　マァムとイレナのやり取りを聞き、ダナはおかしそうに笑いをかみ殺していた。
「恋愛なんて興味ない、男なんて関係ないって感じだったマァム

が、こんなに早く結婚するなんてね。」
　その言葉に、マァムはますます、頬を染めてうろたえた。
「け、結婚って・・・だ、だって、私、式も何もしてないし・・・。」
「一緒に暮らしてるんだし、結婚してるんでいいんでしょ？」
「そ、そうかもしれないけど・・・。」
　イレナは、左の拳に顎を乗せ、頬杖をついたまま、広場に視線を向けていた。そのまま、マァムに顔を向けずに、彼女に尋ねた。
「・・・ねえ、マァム。なんであの人と結婚したの？」
「・・・なんでって・・・。」
「理由、あるんでしょ？」
　そう尋ねられ、マァムは考えた。
　マァムとヒュンケルは、儀式めいたことは何もしなかった。半年ほど前に、ヒュンケルをネイル村に連れてきて、レイラやこの村の長老、そのほかの人々に挨拶をし、それからは、二人で一緒に生活をしている。
　もちろん、二人とも、これからもずっと一緒に生活をしていくつもりであり、互いに家族であるという意思がある。
　だから、イレナの言うことも間違ってはいなかった。
　だが、改めて言葉にされると、マァムとしてはまだ、気恥ずかしい思いがした。
　ヒュンケルと二人で暮らそうと思った、その理由は、マァムには、たくさんあった。
　大魔王との戦いが終わった後、地底魔城で育ったヒュンケルには、家族もなければ、帰る故郷もなかった。
　それから数年の時を経て、彼と想いが通じ合ったとき、マァムは、彼にしてあげたいと思ったことがたくさんあった。
　マァムは、彼に故郷を作りたいと思った。
　家族を作ってあげたいと思った。
　彼がなかなか経験できなかった、市井の暮らしを味わってほしかった。
　戦わないで済む時間を経験してほしかった。
　だが、結局、それらさまざまな思いは、ただ一つのマァムの気持

ちに集約できるものであった。
　マァムは、呟いた。
「・・・一緒にいたかったから。」
　その答えに、イレナは笑みを浮かべた。
「やっぱり、それが一番よね。
　・・・一緒にいたいから、約束を交わすのよね。」
　マァムは彼女に顔を向け、幼馴染の横顔を見つめた。
　聞いたばかりの祖父の言葉を思い出した。
「イレナ。
　・・・聞いたの？」
「まぁね。
　私も決めなきゃなって。
　なんか、いろいろ考えちゃってたんだけど、マァムの話聞いて、思ったわ。
　シンプルに考えた方がいいんだろうなって。」
　そうつぶやく友の顔は、少し前の自分を思い起こさせるものであった。
　マァムとイレナが話していると、ダナが広場の真ん中を指さして、声をあげた。
「あ、マァム。ほら。」
　マァムは、ダナの指さした先に視線を移した。
　見てみると、子どもたちの打ち込みが終わったようで、子どもたちは、広場の隅に集まっていた。
　すると、広場の中心に残っていたヒュンケルにアレクが近づいていった。普段は大工をしている彼は、子どものときから上背のある子だったが、いまでも大柄だ。何やらヒュンケルに話しかけている。
　そうして、二人は少し距離を取ると、お互いに剣を持って向かい合った。二人の間に、マクシムが立ち、右手を高く上げた。
　ダナが声をあげた。
「え、うそ！やるの？
　マァム、止めなくていいの？アレク、怪我するわよ。」
　だが、マァムはゆったりと構えていた。

「大丈夫よ。お互いにわかっているわ。怪我させたりしないわよ。」
「・・・理解度が高いわね。」
　ダナが呆れたようにつぶやいた。
「楽しみね。」
　イレナは、興味深げにそう言った。
　ヒュンケルとアレクは、互いに剣を向けあった。子どもたちを相手にしていたときの木刀ではなく、二人とも、鋼の剣だ。もっとも、剣術用の刃のない鈍らの剣であった。
　大人同士の本格的な立ち合いが見られると思わなかった子どもたちは、色めき立った。
　子どもたちは、口々に、二人に声援を送った。
「ヒュンケルがんばれー！」
「アレク—！負けるな—！」
　一瞬の静寂の後、マクシムが、さっと右手を下ろした。
　それが合図だった。
　ヒュンケルと、アレク。二人は、同時にとびかかった。
　一合、二合。
　剣を打ち合う音が響く。
　二人の様子を見て、ダナが感心したように声をあげた。イレナも言葉を交わす。
「へえ、アレク、頑張ってるじゃない。ヒュンケルと渡り合うなんて。」
「マァムの旦那さんが手加減してるんでしょ。」
「それはそうね。
　ねえ、マァム。」
「・・・うん。」
　マァムは、眉根を寄せて、目の前の立ち合いの様子を見つめていた。
　ダナは不思議そうに、マァムに声をかけた。
「マァム？」
　マァムははっとして、ダナを振り返った。
「あ、ごめん、ごめん。」

マァムは、慌てて取り繕った。だが、マァムは、もうこの立ち合いの様子を見ていられなくなり、二人から視線を外した。
　マァムは思った。
—遅い。
　ヒュンケルの剣さばき、体さばきが遅すぎるのだ。
　かつてのヒュンケルの身のこなしは、マァムよりも格段に速かった。
　しかし、今目の前で立ち回る彼の体の動かし方、剣のさばきかた、いずれをとっても、マァムの目で追いきれるものになっていた。
　それは、本職ではないアレクを相手にしていることゆえの手加減だけに起因するものではないことは、マァムにはわかっていた。
　そう、わかってはいたのだ。
　ヒュンケルは、あのバーンパレスでの戦いで、体を壊した。それまでの過酷な戦いで負った傷は、彼の体に深く刻み込まれた。それは、マァムの師をして、もう戦うことはできないと言わしめたほどの深刻な傷だった。
　老師ブロキーナの見立ては正しかった。
　連戦の末に負ったヒュンケルの怪我は、もはや回復呪文でも癒しきれなかった。
　日常生活に支障はない。しかし、最盛期のヒュンケルに比し、そのスピードもパワーも格段に落ちていた。
　ヒュンケルは、いまは、ブラッディ—スクライドも、海波斬、海鳴閃もかつてのようには撃てない。大地斬、地雷閃も威力が落ちる。空裂斬、虚空閃は使えるが、物理的威力は弱まっていた。
　頭では、理解していた。
　だが、こうして、実際にヒュンケルの動きを目の当たりにすると。
　往時の、ライバルをして、「最強」と言わしめた彼を知るマァムとしては、ずきりと胸が痛んだ。
　からん、と、ひときわ高い金属音が響いた。
　マァムが視線を向けると、ヒュンケルがアレクの剣を弾き飛ばしていた。ヒュンケルは右手を大きく横に振り払っていた。まっすぐ

に、彼の握る剣が伸びる。
　わっと、子どもたちの歓声が響いた。
　ヒュンケルとアレクに、審判役だったマクシムが近づく。いつの間にか、先ほど別れたシモンも広場に来ていた。
　村の若い男たちの間に混じって、ヒュンケルが笑みを浮かべている。
　その様が、マァムにはとても温かく、かけがえのないものに映っていた。
　それなのに。
　先ほどの、ヒュンケルの動きを見ていると、マァムはたとえようもなく悲しい気持ちになった。

　その日の夜、ヒュンケルは、マァムとテーブルを囲みながら、軽く酒を酌み交わしていた。
　この日のメインディッシュは、シモンから分けてもらった鹿肉で作った赤ワイン煮だった。チーズとバケットが添えてある。
「おじいちゃんも、味見して、おいしいって言ってくれたのよ。」
　そういうマァムは自信ありげだった。
「ああ、旨いな。」
　そう言って、ヒュンケルも満足そうに笑みを浮かべた。
「今日は疲れたでしょう。たくさん、子どもたちを相手にしてたものね。」
「そうだな。」
「・・・アレクと立ち合いまでして。」
　その言葉に、ヒュンケルは苦笑した。
「マァムが見ていたとはな。」
「気付かなかったの？」
「ああ。」
　ヒュンケルは、困ったような笑みのまま、言葉をつづけた。
「大人げないと思ったか？大工のアレク相手に、戦士だった俺が立ち会ったのは。」
　その言葉に、マァムは首を横に振った。
「手加減していたんでしょう？

ダナは、アレクがケガするんじゃないかって心配してたけど、私は大丈夫よって言ったのよ。」
「そうか。」
「アレクは、やっぱり勝てないって悔しがってたわね。」
「そうだったな。
　俺も楽しめた。」
　ヒュンケルの言葉に、マァムは意外な思いがした。マァムは彼に尋ねた。
「そう？だいぶ実力差あるでしょう？」
　だが、返された言葉は、マァムが予想もしないものだった。
「もとはな。
　確かに今日も、俺は、手加減はしたが・・・だが、本気でやったとしても、今の俺では今日の立ち合いとあまり差はないな。」
　マァムはとっさに、その言葉を否定したくなった。
「そんなこと・・・。」
　だがヒュンケルは淡々と言葉をつづけた。そこに悲愴な色はなかった。
「例えば、今の俺では、ラーハルトとの立ち合いは無理だ。あのスピードにはもう追いつけない。
　マァムとも厳しいな。お前は、あの頃の強さを維持している。
　仕方がない。大魔王との戦いのときに、かなり無茶をしたからな。」
　マァムは無理に笑顔を作った。
「でも、あのときよりはよくなったでしょう？」
　ヒュンケルはうなずいた。
「ああ。マァムが何度も回復魔法をかけてくれたからな。
　それには感謝している。
　ありがとう。」
「ううん。あなたがよくなってくれればそれでいいの。」
　マァムは漸く安心して笑顔を浮かべた。
　だが、次のヒュンケルの言葉は、マァムの胸に、昼間感じた寂しさを思い起こさせるには十分なものだった。
　ヒュンケルははっきりとした口調で言った。

「だが、もう、あの頃と同等までの腕力やスピードを取り戻すのは無理だな。」
　その言葉に、マァムがすっと眉根を下げた。
　八の字になった彼女の眉に気付き、ヒュンケルは励ますように、言葉をかけた。
「心配するな、マァム。悲観しているつもりはない。
　俺にとっては、剣は戦うための手段でしかなかった。
　だが、こうして、子どもたちを相手にしたり、アレクと立ち会ったり、戦いとは無縁のところで剣をふるうのも、それはそれで楽しいものだな。」
　そう言って、ヒュンケルは穏やかに微笑んだ。
　ヒュンケルが、マァムを安心させるために無理をしているのではないことはわかっていた。本心からそう思っているのだろう。この村では、彼は戦士である必要はなかったからだ。
　だが、かつての彼の強さを知るマァムは、何故か、寂しさを拭い去れず、目の奥がつんと傷んだ。

　夜半、マァムは、ベッドでヒュンケルの温かさに頬を寄せた。
　つい先ほどまで、お互いの熱を感じあい、彼の想いを強く受け止めていたマァムは、いまは、ヒュンケルの胸元に頬で触れ、けだるさとともに眠りにつこうとしていた。
　だが、マァムは、広場でのことが頭を去らず、眠れないまま、じっと、ヒュンケルのぬくもりを感じていた。
　不意に、マァムは、無性に彼を抱きしめたくなった。
　体を横にしている彼の背に両腕を回し、ぎゅっとその素肌を抱きしめた。
　眠っているのだろうか。ヒュンケルは身じろぎもしなかった。規則正しい呼吸の音だけがマァムの耳に届いた。
　マァムの両手が、ヒュンケルの裸の背に触れた。
　その手触りだけで、そこには、大小の様々な傷跡が残されていることが感じられた。
　それは、彼が多くの命を守ってきたことの証であり、無形の勲章であった。

マァムは、ヒュンケルを抱きしめながら、強く思った。
—・・・この人を、守りたい・・・。
　窓の向こうから、森で鳴く梟の声が響いてきた。